



協同の歴史の瞬間

第115回

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」 (その19)

1935(昭和10)年10月号

東助、江東消費組合の仕入れ部職員として働きだす
盲目の鈴子の目が開く

東北・北海道の農業・産業組合の先進事例を学ぶ



監修 **堀越芳昭**
山梨学院大学 元教授

東京で暮らし始めた東助、浦江夫人と再会する。浦江夫人は、「江東消費組合が仕入れ係がほしい、と言っているので一緒に行こう」と勧めるとともに「中野の組合病院が、鈴子さんの病気に便利を図ってあげると言っている」と伝える。

鈴子はお竹に伴われて組合病院へ、東助は浦江夫人とともに江東消費組合へ行って、その晩から組合の二階に住み込んで仕入れ係として働きだす。組合病院に入院した鈴子の病(目が見えない)は順調に改善に向かい、入院から六日めには目が開いた。そのことの連絡をお竹から受けた東助は万歳三唱し、喜びの涙を流す。

年の暮れ近くになって、東助に青森県弘前のリンゴと北海道酪農組合のバターを仕入れる仕事が回ってきて、東北・北海道に向かう。ともに農業・産業組合の先進事例であり、東助はそれぞれで感銘を受ける。

仕事を終えて東京に戻った東助を待っていたのは、警察の取り調べであった。しかし、これが結果的に東助を再度、大塩村に戻すことになる。

■ 浦江夫人の紹介で東助、江東消費組合で働きだす

大塩村を追われた東助は、先に上京していたお竹と鈴子の借りていた一軒家に落ち着く。

そこに、ずっと前に、鈴子を誘拐して遊郭に売った悪漢真田益吉が現れお金を要求するが、お竹はわずかな金を包んだ紙を渡し、真田を追い返す。

それと入れ違いに、かつて高円寺消費組合で働いていた東助を側面から支えてくれた童話作家の浦江夫人が電車道から降りてきて、二人は出会う。そして、浦江夫人は次のように言った。

「田中さん、あなたの仕事、あってよ。江東消費組合があなたなら使ってあげますって。仕入れ係が一人ほしいんだそうです。これからわたしといっしょに本所まで行かない？ 連れていってあげるわよ。ああそうそう、それからね、医療組合の大瀬博士が鈴子さんにマラリア菌を注射してみたらどうかって、言っておられましたよ。マラリアの熱で、どうかすると梅毒がなおるんですってね。そのうえなおらなければ、大瀬博士の知っている小野という眼科の博士に、組合病院で手術してもらうような便利を図ってあげますって——そう言っていらっしゃいましたよ」

長い引用になったが、少し解説を加えると、遊郭に売られた鈴子は梅毒をうつされ、さらに大塩村でチフスが大流行したときに避病院において一人で患者の世話をしたが、その負担に体が耐え切れずに目が見えなくなっていたのであった。

鈴子はすぐお竹に伴われて中野の組合病院に入院することになった。そして東助も江東消費組合へ、浦江夫人に連れられていった。

専務理事の立木道則、彼を助けて主事としていっしょうけんめいに努力している野水清太郎は、東助をにこにこしながら歓迎してくれた。無口な二人にかわって、浦江夫人が組合の事情を東助に話した。

「無産者階級の消費組合が、二十六、七も一時はありましたがね。たいていつぶれたり、経済的困難におちいつているんだけれど、ここだけは不思議にうまいこといつているというのは、立木さんや野水さんの献身的努力にもよるのでしょうか、あまり、りくつを言わないで、組合運動すること、そのことが、無産者の解放になると思って尽してこられた結果が、今日の大をなしたんでしょうね。だから、あなたもいっしょうけんめいに立木さんを助けて、組合の拡充に努力なさいよ」

浦江夫人はここでも東助に奮起を促した。東助はその晩から、組合の二階に住み込んで、仕入れ部の仕事を受け持つことになった。

■ 盲目の鈴子の目が開く

一方、鈴子も歓喜すべき事態に恵まれた。

中野の医療組合病院に入院してマラリア菌の注射をしてもらった鈴子の成績は非常によかった。一時は四十二度近くも発熱して、うわ言ばかり言うので、どうなることかと、付き添いに行っていたお竹も心配したが、結果は非常によかった。入院してから五日めに、鈴子は右の目が見えるようになったといって、病床の上で、お竹に喜びのあまり、しがみついた。(略) 六日め

の朝、彼女が目をさますと、二間先を歩いている人間が、棒のように見えた。喜んだのは鈴子よりお竹であった。さっそく、江東消費組合に電話をかけた。

「おめでとう、東助さん。鈴子さんの目が開いてよ。もう手術する必要なんかないわよ。大瀬先生は、これならだいじょうぶ、左もおっつけ見えるようになるだろうと言っていられますよ。ほんとに奇蹟ね。今夜は祝賀会をしようと思っていますから、あなたもぜひ、中野まで来てちょうだいね」

これを聞いた東助は、一人で万歳を三唱した。万歳した理由を尋ねた野水に「盲であったわたしの妻の目が開いたんですよ」と答え、それを聞いた専務の立木もお祝いの言葉を述べた。配給人の一人は、大声で賛美歌を歌いだした。

ああ神様のいけます日

荒野にも花咲きて

跛足は躍り立ち

盲目の目ひらけん

みすくいをうけしもの

かちうたをシオンにあげ

悦びはみちて

かなしみは消えなん

その声が、澄みきった秋の空気をゆるがせて、遠くのほうまで聞こえた。

店で紙袋に一斤ずつ砂糖を詰めていた東助は、喜びの涙をそっと、シャツの袂でふいた。

■ 弘前の林檎販売組合に学ぶ

年末が近づいた。東助は江東消費組合が加入している東京消費組合連合会の共同仕入れをするために、立木道則に頼まれて、北海道酪農組合のバターと、青森県弘前のリンゴを仕入れるために、東北に旅行せねばならなかった。上野を出た汽車は、仙台で夜が明け、一ノ関で乗った年取った客は東助の隣に腰をおろし、話しかけてきて、シガレットを東助に勧めた。東助がそれを辞退すると、老人は次のように続けた。

「いや、こんな疲弊していてもぜいたくだけは覚えますからなあ。村は立っていませんよ」

そうしたことを冒頭に、老人はイネ作中心の農業が東北で失敗であること、どうしても多角形農業をやらねばならないことを繰り返して述べた。東助も彼に調子を合わせて、福島県の山奥で経験した実際を、老人に物語った。

その老人と盛岡で別れ、弘前に到着して、支線に乗り換え黒石町の産業組合を

訪問する。専務理事の力石初三郎は、江東消費組合の立木をよく知っていたため、東助の訪問を歓迎し、青森県のリンゴの販売組合が、大成功であることを語った。

「きみ、なにしろ今じゃあ、この地方では、リンゴを年に二千万円から生産するんだからね。ばかにできないですよ。これが、五十年前には青森県にリンゴの木一本もなかったというんだからね。なんでも藤崎村の佐藤勝三郎という老人が、イングという米国の宣教師からクリスマスに、贈り物としてもらっ



たリンゴを、そのまま植えたのが始まりだということですからね。おもしろい因縁もあったもんですよ。それが今日じゃ、他の東北地方がどんなに困っていても、リンゴの木の植わっている岩木山のほitoriだけは、飢餓のときにも困らんというんですからね。まったくリンゴ一つを食わずに持って帰ったその克己心から、南津軽を救うことができたというもんですよ——」

それから、彼は、林檎販売組合の倉庫を案内してもらったが、江東消費組合のような小さい店を見ているものにとっては、想像もつかないほど大きいものであった。東助は、産業組合の威力をそれによって知り得たとともに、東北を救う立体農業の秘策が、このあたりに伏在しているように思われてうれしかった。彼はさしあたり、リンゴを千箱だけ組合に注文して、北海道に渡った。

長い引用になったが、ここには青森県におけるリンゴ生産の出自を確認するとともに農村・農民を救うためには立体農業、産業組合の力が必要であるという、賀川の持論が展開されている。

■ 北海道の酪農組合に学ぶ

小樽を経て札幌に着いた東助は、午後四時過ぎにもかかわらず駅から北海道酪農組合に電話をかけて工場と打ち合わせ、訪問することになった。

工場は、外観においてやや貧弱に見えたけれども、内にはいると、その規模の近代的なものと、設備の完全しているのに一驚した。案内してくれた佐藤理事はバターを作る工場を彼に見せながらこんなことを言った。

「田中さん、まったく資本家というものはわがままなものでしてね。少し景気のいいときには北海道までやってきて、ウシを飼え、ウシを飼えと勧めておきながら、いったん不況が来ると、万に近い百姓の窮状も察しないで、夜

逃げするようにして、東京へ引き揚げていってしまうんですからね。で、わたしたちは、背水の陣を敷いて、見すてられた農村をあとからあとからまとめていき、今ではほとんど全北海道を一つに組織したんです。いや、ここまで来るには、宇都宮仙太郎さんのような先輩があったればこそできたんですよ。東北六県が飢饉で困っていても、北海道が少しも困っていないというのは、まったく乳製品のおかげだといえましようなあ。実際農作物のできぐあいは、東北より北海道のほうが悪いのですがなあ。ウシの乳があるばかりに年二千五百万円の収入があり、おおいに百姓は助かっておりますよ」

それを聞いて、東助は、ここにも東北を救う根本原理が実証されていることに気がついた。

で彼は、酪農組合の製造品である雪印のバターを一万五千ポンド注文した。そして手付金として千五百円を即座に入れた。

資本家から見捨てられた農村を丁寧なままとて行き、全北海道を一つに組織したという産業組合の努力があったからこそ酪農が発展し、飢饉と無縁な農村ができて上がったことを東助は見たのである。

二つの先進事例を見て東京に帰った東助を待っていたのは、大塩村産業組合の金を使い込んだという嫌疑であり、警察の取り調べであった。しかし、これが東助を大塩村に戻らせることにつながる。次回は東助の産業組合による村おこしの奮闘を見ていきたい。

<参考文献>

『家の光』(昭和10年10月号)

*文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』(2009年)を参考にした。

*文中に今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句や表現が使われていますが、作者が故人であり、また、差別助長の意図で使用していないこと、作品の時代背景を考慮し、原文のままとしております。